別紙

1 活動名

奈川地区活性化施策視察

2 調査の目的

(1) 本市における課題

持続可能なまちづくりは総合計画に位置付ける「ひと・地域」のシンカを具現化する取り組みの総称で、市内35地区それぞれの固有な地域特性を活かしつつ課題解決を図ることで成し遂げられる。その中で、西山アルプスエリアを構成する安曇乗鞍地区及び奈川地区は岳都松本の中心的エリアであるが、乗鞍高原を中心とした観光資源の利用減少、活かしきれていない現状など、急激な人口減少が進む奈川地区においては地域活力の衰退は持続可能なまちづくりの視点として大きな課題がある。

(2) 調査の必要性

奈川地区においては、「奈川のみかたをふやす道標」と題する持続可能な奈川地区推進計画2023を策定し、まちづくりに取り組み始めている。この中で、奈川地区における推進計画の推進の具体的な取り組みについて令和6年2月定例会一般質問で取り上げたが、計画策定の母体である持続可能な奈川地区推進協議会と連携する松本市の関係が分かりづらい点があった。持続可能な奈川推進計画策定には、市長肝いりでまちづくりコンサルタント「スタジオ L」が関わり、様々な取り組みが計画されている。特に野麦峠スキー場については存廃を含めあり方を2023年に決めていくとしていたが、協議会は検討課題が多く、決定に至らなかったとして決定時期を先延ばしした。一方、NPO法人「あぐり奈川」を設立し奈川の有力資産である農業を活用した雇用創出を行い過疎化解決の動きが具現化、2月定例会にはその活動への支援を求める請願が提出され採択された。この様に奈川地区においてはこれらの施策が動き出し、今年度予算にコンサルタント委託料1000万円を計上していることから、地区住民と取り組む内容は計画推進に重要な課題と捉えている。

(3) 調査項目

奈川地区のステークホルダーの推進計画に対する取り組み内容と意欲等考え方及び行政への要望

3 調査地選定理由

(1) 奈川小中学校:存続が危惧される小学校の現状と学校給食
(2) 製材所のパン屋さん:廃業した製材所による地域資源活用と地区振興拠点としてのパン屋
(3) ㈱ふるさと奈川観光交流部:地域振興の観光としての新たな取り組みの考え
(4) NPO法人あぐり奈川:農業を活用した地域振興の取組状況
(5) 持続可能な奈川地区推進協議会:推進計画策定主体の推進に対する現状と考え
(6) ウッディ・もっく:森と温泉のアウトドアと銘打つ施設現状確認
(7) 奈川木工施設組合:地域産材の製材状況

4 調査結果

(1) 実施日 2024年4月9日(火)、10日(水)
(2) 出席者 4月 9日:神津ゆかり 花村恵子 上條一正

4月10日：神津ゆかり　花村恵子

（3）　調査内容

ア　奈川小中学校：相手：青森隆俊校長

・ 授業参観　複式学級　児童生徒と複数の先生たちがいっしょに授業を進めていた。

・ 学校給食（自校給食方式）を試食。学校のすぐ横にある調理室で調理。調理室と教室の距離が近いため、おかずやお汁をあたたかいままいただける。給食は教室ではなく、ランチルームで、小学生と先生たち、中学生と先生たちがいっしょにいただいていた。

イ　製材所のパン屋さん　相手：向井建設専務取締役向井亜紀子氏

・ 製材所の廃止は8年ほど前になるが、機械は高圧の引き込みと職人がいれば稼働は可能。

・ 創業当時は地区内に三軒の製材所があり、地域内で木材の循環があったが需要面でも採算面からも単独の再開は困難。

・ パンは窯を含め全ててづくり、遠くから購入しに来ていただいている（パン生地を[redacted]氏の妹さんの[redacted]氏が作り[redacted]氏が焼く）。奈川小学校の給食に複数回/年提供。「おいしいのでもっと出してほしい」と奈川小児童の声

ウ　㈱ふるさと奈川観光交流部　相手：観光交流部長　高宮澄男氏

・ 地域資源の代表格としてそばを活用した観光の展開として蕎麦集落をつくりたい。

・ そば粉は奈川在来品種を使い、空き家を活用し若手の創業を期待。40代くらいの年代者で蕎麦打ち未経験者も対象として技術支援する。

・ NPOあぐり奈川との連携

エ　NPO法人あぐり奈川　相手：法人理事長　田中浩二氏・副理事長中野清美氏

・ 収益性から蕎麦に加えキャベツを主体に考えている。納入先は市の学校給食センターで高原野菜の有益性を売りにしたい。

・ 作業を地区内の高齢女性を対象とし、少ない作業賃であるが地域を繋ぎたい。

オ　持続可能な奈川地区推進協議会　相手：協議会長勝山裕康氏

・ スキー場の存廃等の先延ばしは、ステークホルダー（指定管理者、スキークラブ、スキー学校等）間の意見調整が必要なため。

・ 計画推進支援のスタジオLには、推進を支える体制づくりとしてのワークショップやぐるぐるカフェへの支援から、推進計画本文に重点的な取り組みに対する具体的な支援を強く望む。

カ　地元関係者と意見交換（旅館・仙洛にて）　相手：忠地義光氏、奥原二三氏

・ 奈川地区の若者の地域活性化に向けた動き、市の協力体制について　地元の意見、要請を伺う

キ　ウッディ・もっく　現地確認（目視）説明者無し

・ ログキャビン（4 棟）、キャンプサイト、温泉施設「もっくの湯」（料金　大人 410 円、子ども 310 円）を現地確認した。温泉施設は老朽化がはげしく改装が必要と聞いている。敷地内には使われていない木造建築物「旧奈川自然観察館」があり、入口周辺のウッドデッキは朽ちて危険な状態、アプローチも草が伸び放題であり、見た目が悪い。改修して再利用するのか、撤去するのかの判断が必要ではないか。

・ また、今回は現地確認できなかったが、ウッディ・もっくの奥にある公園「フォレストフィールド」内の木製遊具の老朽化が激しく、利用者にトゲが出ているなどの不具合があると聞いている。管理者は必要な修繕を適宜進めるべきと考える。

ク　奈川木工企業組合　相手方　小林昭彦代表理事

・ 現在はミサワホームの建材、部材を加工しているが、以前は地域産のカラマツの用材を乾燥させ、壁材や床材などに加工していた工場である。奈川の山々のカラマツ林に

は 50～60 年生で伐期を迎えているカラマツが多い。以前は林業が盛んで、林業従事者も多かったが、現在はほとんどいない。奈川地区内のカラマツはほぼ全て石川県七尾市にある合板工場に出荷されている。奈川地区内のカラマツの一部を地区内にある製材所[redacted]で皮曳きし、この工場でカット、加工ができれば、地域内生産加工、木材の地産地消が可能になる。

(4) 成果・所感等

持続可能な奈川を合言葉とする「奈川のみかたをふやす道標」のステークホルダーとなると考える方々と意見交換し現地の状況を確認した。それぞれ個々の取り組みの積み上げの上に奈川の将来があるという強い意気込みは感じることはできたが、目に見える効果が表れる結果を得るのは非常に難しいことを実感した。

例を挙げる

地区にとっての一番の懸案は「野麦峠スキー場」の存廃問題であるが、推進協議会に判断をゆだねている市の方針に対し、地元の責任の重さに耐えられない状況を受け止めた。また、NPO 法人あぐり奈川は、田中氏の強い意志でキャベツ栽培に着手(市の補助金支援もあり)しているが、地域全体をつなげるには従来から活動している㈱ふるさと奈川とのれんけいがかかせない。その関係はあまりよくないと受け止めた。また、地域資産である木材活用に関しては、製材工場の閉鎖が従業員の高齢化と地域産材利用の減少にあるが、民間の力だけで再稼働できないので、松本市の木材政策の中での位置づけを検討する必要がある。

5 政務活動費

(1) 使途項目 調査旅費

(2) 支出額 30,593 円 (宿泊 11,800 円×2人 神津ゆかり、花村恵子)

(往復ガソリン代神津ゆかり 4 月 9 日、10 日、 上條一正 4 月 9 日 合計 6,993 円)